

「ALL RIGHT」



(オーライ) 「大丈夫／うまくいく (All Right!)」
「誰にも (All)、幸せになる権利 (Right) がある」

Vol.9
2025年11月

●第2回拡大運営部会を開催

広がる支援の輪、立ち直りを支えるために

さる8月24日、東京社会福祉士会「立ち直りを支える地域支援ネットワークづくり事業部」の第2回拡大運営部会が、大塚の福祉財団ビルを会場にリモート併用で開催され、現在活動している8支部（あだち、おおた、北、江東、杉並、世田谷、西多摩、三鷹武蔵野<五十音順>）の運営メンバーと、事業部の業務執行に携わる運営部員、担当理事、ならびに休眠預金活用事業の資金分配団体である「更生保護法人日本更生保護協会」の事務局など、関係者が一堂に会して、活動紹介と意見交換を行いました。

2024年6月の第1回拡大運営部会は「顔合わせ」の意味合いが強かったのですが、今回第2回は各支部がそれぞれの活動実績をもとに意見表明し、互いに言葉を交わす姿が印象に残りました。

とりわけ、今回は、本事業が目指してきた「地域支援ネットワークづくり」がどのように構築されつつあるのか、その支援の輪の広がりを見える化するために、支部ごとにエコマップを作成しました。また、事例を用いて支部ごとに支援体制をシミュレートする試みも行われ、過去3回実施された広域ネットワークづくりシンポジウムのコーディネーターである今福章二氏（全国更生保護法人連盟理事長）のご出席を得て、社会福祉士が行う立ち直り支援に期待することなどのコメントをいただくこともでき、有意義な時間となりました。



左：事例説明／中央：講評する今福章二氏／右：グループごとに「エコマップ作成」

もくじ

- 第2回拡大運営部会を開催 1
広がる支援の輪、立ち直りを支えるために
- 各支部の活動状況（2025年7～10月） 2
地域づくりイベント、上映会、要支援者への伴走支援等
（おおた、杉並、あだち、世田谷）

- 第3回広域ネットワークシンポジウムのご報告 9
SOSに気づき、受け止め、伴走し、地域をつくる
——支援者・支援機関の孤立を防ぐ“支え合い”の必要性
- リレーコラム 20
「支援に対する関心の高まりを、どう次につなげていくか」

●各支部の活動状況（2025年7～10月）

地域づくりイベント、上映会、要支援者への伴走支援

東京社会福祉士会の「立ち直りを支える地域支援ネットワークづくり事業」は希望する「地区社会福祉士会」を実質的な活動主体（支部）として、地域内に立ち直り支援のためのネットワークを形成・強化する取り組みです。2023年10月の開設以来、今日に至るまで、あだち、おおた、江東、杉並、世田谷、西多摩、三鷹武蔵野、北区の8支部が設立され、それぞれに特色ある活動を展開しています。以下、直近の活動状況について、概要をご報告いたします。

おおた社会福祉士会

「セミナー」開催（2025/8/30）

“社会を明るくする運動” 地域集会として、 「マチに回復共同体をつくる。運営する。」を開催！

おおた社会福祉士会では、毎月さまざまなテーマでどなたでも参加できる形で学習会を実施しておりますが、8月は「マチに回復共同体をつくる。運営する。」というテーマで、8月30日（土）14時～17時に大田区消費者生活センター大集会室にて開催しました。この日お招きしたゲストスピーカーは、同志社大学心理学部教授・毛利真弓氏、島根あさひ社会復帰促進センター回復共同体修了生・真人氏、フログサークル財団・中村梨絵氏です。当日は会場53名、Zoom75名（申込者数）と、多くの方にご参加いただきました。



“社会を明るくする運動” 地域集会として開催

8月拡大定例会は“社会を明るくする運動” 地域集会として開催しました。“社会を明るくする運動”～犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える地域のチカラ～は、すべての国民が、犯罪や非行の防止と犯罪や非行をした人たちの更生について理解を深め、それぞれの立場において力を合わせ、犯罪や非行のない安全で安心な明るい地域社会を築くための全国的な運動です。2025年で75回目を迎えます。おおた社会福祉士会、おおたTSネットは、“社会を明るくする運動” 大田区推進委員会構成機関・団体(35機関・団体)であり、2021年3月に大田区再犯防止推進計画に基づき設置された大田区再犯防止推進会議の委員にも選出されています。

この数年、「おおた社会福祉士会」と「おおたTSネット」は年に1度のペースで共催のイベント

を実施してきておりますが、今回はさらに、お隣の神奈川県川崎市で活動を展開している「かわさきTSネット」もあわせた3団体共催で、本イベントを実施できる運びとなりました。

回復共同体は、これまでの支援観、支援のあり方に変化を求める方法でもある

はじめに、同志社大学心理学部教授・毛利真弓氏に「マチに回復共同体をつくる。運営する。一回復共同体がめざすもの、もたらすもの一」と題して、ご講演いただきました。回復共同体（TC：Therapeutic Community）の沿革など基本的な事柄から、毛利氏が支援員として運営に携わっていた島根あさひ社会復帰促進センター（刑事施設）での回復共同体の実践についてお話いただきました。



続くトークセッションpart1では、「当事者からみたTC、支援者との関係」と題して、島根あさひ社会復帰促進センター回復共同体修了生・真人氏が登壇し、毛利氏によるインタビュー形式で真人氏と対話していく形になりました。トークセッションpart1後には、当日の会場参加者同士で小グループをつくり、感想や意見交換をする「分かち合い」の時間がありました。



トークセッションpart2「マチに回復共同体をつくる。運営する」では、神奈川県川崎市に2025年11月に開設する自立訓練事業所「ReL（リエル）溝の口」施設長・中村梨絵氏を加えたお三方が小さなサークル、その周りを当日の会場参加者で大きなサークルをつくりました。「ReL（リエル）溝の口」はフログサークル財団が開設する事業所で、回復共同体の手法を用いたプログラムが取り入れられます。お三方の対話後には、「フロアとの対話・全体での分かち合い」の時間もあり、対話を重視する回復共同体の手法を会場全体で体感する時間となりました。

終了後に参加者から提出いただいたご意見・ご感想は下記のようなものがありました

▼一度、毛利さんの講演を拝聴したかったので、よい機会に恵まれました。真人さんの実体験のお話も聞けて大変参考になりました。同じ人間としての支援を大切にしたいと思いました。スタッフの皆さま、ありがとうございます。

▼毛利さんのご経験に基づいたノウハウのご教示、勢いと迫力がありました。また、まさとさんが自分の言葉で語られた体験やお考えが、当事者の声として、心に届きました（応援しております）。中村さんの取り組みにも、注目しております。お三方とも、ありがとうございました。事務局の方々も、学びの多い機会をご用意頂き、お疲れさまです。ありがとうございました。

▼プリズンサークルの本を読み、映画を観て、ようやく毛利さんのお話と当事者のお話を聞くことができました。本法人では主に思春期の方々の支援をしていますが、困り感はさまざまです。年代も不登校の小学生から30歳代の男性で自己破産するようなことになっている人まで様々です。それぞれに個性があり、社会にはじかれたような経験をしています。どこかで社会に混ざりたいという欲求みたいなものを感じます。本日のような回復共同体を作るためには、来られている方との対話だけでなく、周りの方との対話が必要だと学びました。学校も仕事も忙しすぎて、心（こころ）を亡くしている状態のように感じます。当事者（だけではないのでしょうか）の周りの方々とも対話できていけばいいなと感じました。ありがとうございました。

▼毛利さんのお話はとてもわかりやすく、楽しかったです。また、真人さんとても自然体でお話くださって、良かったです。分かち合いは、コミュ障の私には少々大変でしたが、他の方々の話を伺って、良かったです。

▼zoom参加でのグループセッションも有意義でした。毛利先生のお話にあった「お母さん」にならない、まささんが話された対等な関係性などについて話し合いました。自分を振り返って、対話的な学校をつくりたいと思いました。

▼定員50人もの方々一人ひとりが、わずか半日のプログラムで、どの様に自らを見つめ直し客観化して、犯罪を経験した自分を話せるまでになるのか、講演当初しっくりこなかった。イメージがわからないのだ。AAによる回復は、セッションに通い続け『足から直る』と言う。継続と他者との関係。きっと6か月間、施設内TCを続ける事で、自分の中で『引っ掛かり』に気付くのだろう。しかも、同じ施設内TCの他者と関係性を持たざるを得ない。言葉を使ってコミュニケーションをとり、社会性を獲得する。そう理解させていただいた。今後は施設から離れ、生まれたばかりの「財団」によって、「マチ」の中でTCによる社会復帰が図られる！フログの方々の明るい未来を願ってやまない。

▼この度は、映画「プリズンサークル」に登場した毛利真弓さんと真人さんのお話を聴く機会を作って下さいまして、誠にありがとうございました。「プリズンサークル」が大好き過ぎて、何度観たかわかりません。

毛利さんや真人さんのお話を伺って、人が人として出会うことの重要性和安心感の深さが伝わってきました。人間関係の中で傷ついた人は関係性の中で回復するという事を、刑務所の中で実践されてこられたことに、あらためて感銘を受けました。

パワーポイントのスライドで触れられなかった部分も含めて、ゆっくりお話を振り返りながら反芻し、まちに回復共同体を作るために私ができることを考え、カタチにしていきたいと思います。

貴重なお話を聴かせて下さって、誠にありがとうございました。真人さん、こころから応援しております。自分の人生を生き抜いて下さい。

▼初めて参加させていただきました。毛利先生のお話しも初めて伺い、「人が育つ場所を意図的につくる」ということがとてもわかりやすく共感できるもので、これからご著書も読んでみたいと思いました。

ご自身の話をしてくださった真人さんにはとても勇気が要ったと思います。ありがとうございました。ここに至るまでは辛いことも多かったでしょうけれど、いまは周囲の方々と信頼関係もでき、自然体で気持ちを話している喜びが感じられて、こちらも勇気づけられました。

自分の気持ちを言葉にすることって誰でも意外とできていないものだと思います。自分の価値観やふ

るまいの癖などに向き合って、安全な場で共有でき、葛藤し学び、成長し合っていけるという体験はすごい財産だと思いました。

むしろ社会で「ふつうに」暮らしている人々のほうが自己に無自覚で、傷つきや不条理による苦しみから目を逸らしたまま病んでいるのでは？と思うことも多いです。そして、そんなモヤモヤの矛先を弱い立場の人に向けるような危険な状況になっているのでは？と危惧しています。まさにコミュニティのほうがTCを必要としているのではないかという気がします。

今回、さまざまな支援や当事者活動の形があり、各方面で取り組んでおられる方々のことを知って、とても心強く、希望を感じました。「対話と尊重の文化をつくる」という言葉にも感銘を受けました。（これまでそんな文化も教育もされてこなかったということです）

対等な人間らしい関係の中でエンパワーし合える社会、「誰もが愛される価値がある」と感じられる社会…にはまだまだ程遠いと思いますが、一步でも近づくよう願うばかりです。

貴重な会を開いていただき、まことにありがとうございました。

▼毛利さんの本「刑務所に回復共同体をつくる」を読み、お話を聞いてみたいと思い、参加しました。お話の中で、「支援者自身が自分の感情に開かれ、感じていることや考えていることを言葉にできる力が必要」ということが心に残りました。私は受刑者支援団体のボランティアをしています、手紙に性的なことを書いてくる人、やたらにクレームを言う人がいます。これまで不愉快に感じつつも無視していましたが、きちんと気持ちを伝え「どうしてそんなことを書くのか」「どうして人を侮辱するような言葉を使うのか」と聞いて、問題に向き合うことが対等な人間関係のスタートなのだと気づきました。ありのままの自分を表現できるようになりたいと思いました。無限の甘えに飲み込まれてはいけないということにも気づきました。学びの多い時間でした。

「マチに回復共同体をつくる」という発想は最初「何のこっちゃ？」と訳がわかりませんでしたが、出所者を受け入れていけるようなマチづくりなんて、夢のようです。

島根あさひのようなTCも多くの刑務所で取り入れてほしいと思います。特に累犯者、長期刑の多い刑務所で実現してほしいです。

▼方法としてのコミュニティを作る、そのときに支援者と呼ばれる立場の側がまず開かれていることが大事だということが、毛利さんのお話ぶり・雰囲気からも伝わってきました。真人さんは、戸惑いもありながら自分という存在をちゃんと掴んで歩んでおられるのだと感じ、優しくそんな眼差しも印象的でした。貴重な機会をありがとうございました。



立直り杉並（杉並支部）

「上映会&トークセッション」開催（2025/9/21）

映画「記憶2」から汲み取る、
生きづらさを抱える人の支援～地域でできること～

杉並支部（立ち直り杉並）では、阿佐ヶ谷地域区民センターにて『記憶2』の上映会&中村すえこ監督、立ち直り支援ネットワークづくり事業部の副部長、そして司法福祉委員会委員長でもある小林良子氏によるトークセッションが行われました。残暑厳しき中、一般参加者、ボランティアスタッフ、登壇者を含め合計113名ものご参加をいただき、盛会裏に終えることができました。

『記憶2』は、少年院の少年たちの赤裸々な言葉から現代社会の問題点を掲げ、「人は変わる、社会は変えられる」をテーマにしたドキュメンタリー映画です。自身も逮捕・少年院入院・更生経験を持ち、現在は高校の教員もされている中村すえこさんが監督となり、製作されました。

できることはたくさんある

上映後のトークセッションでは、専門知識がなくても地域のみなさんにできることはあるかとの問いに、中村監督は「だからこそ『記憶2』を製作しました。映画を観た方が、まず現実を知って自分にも何かできるのではないかと感じて、考えてほしい。できることはたくさんあります」と述べられました。

また、その後の質疑応答では、参加者からの「もし自分の子どもが、映画に出てくる少年から被害を受けたら、少年を許すことができない」という意見表明に対して、中村監督からは、「加害者を許せないと感じるのは自然な感情であり、心が狭いわけではないと思います。立場によって感情が変わるのは当然であり、人間として持つべき感情ではないでしょうか。しかし、自分の子どもが直接の当事者でない状況で、支援者としてできることがあるなら、葛藤を抱えながらも人を助けたいという気持ちを大切に、できることすれば良いと思います」とのコメントを述べられました。



先に支援に入れていれば…

小林良子氏からは、「支援者は、支援を必要としている人に対し、事件を起こしてからやっと介入できる現実がある」と述べ、未然に犯罪を防ぐことの難しさについて語られました。

「助けて」と声を上げられる地域社会に

生きづらさを抱える人が自ら「助けて」と言える社会について考え、できることから実行し続けていく必要があります。支援者であるか否かを問わず、地域のできることを、それぞれが真剣に思案するきっかけになったのではないかと私たちは感じています。この場を借りて、このたびご参加・ご協力くださった皆様に、御礼を申し上げます。



あだち支部 「地域生活開始」への伴走

得意分野を活かし、地域ネットワークを駆使 執行猶予者の「再出発」をサポート

昨夏、あだち支部へ他県のNPO法人より1人の高齢者支援の依頼が入りました。判決を待つ拘留中の身で、執行猶予となったら、かつて暮らした足立区へ戻って再出発を希望しているとのことでした。あだち支部として未経験の支援ではありましたが、いろいろな方の知恵をお借りしながら準備を進めました。

支援内容は、生活保護申請、入院、住居探し、マイナンバーカードの申請、新生活に必要な家具や衣類の調達、在宅生活で利用できるサービスの申請も含めた地域包括支援センターとの連携づくりなど、多岐に渡りました。各メンバーで分担・協力をして、無事、在宅生活の再出発となりました。

その後も日々、いろいろなハプニングは起きていますが、ご本人なりに自分の日常生活を取り戻し、生きる目標を持って過ごしています。メンバーも関係機関やサービス提供者と連絡を取り合い、必要な時には訪問や担当者会議への参加、居場所支援の開催などを通じて、孤立しないよう適度な距離感で支援を継続中です。

メンバーの得意分野は様々ですが、これまでの地域ネットワークを活かし、ご本人を応援してくれる“目”を増やしてきました。これからも一つずつ課題をクリアし、活動を続けるための工夫や努力をしていきたいと考えています。

世田谷支部

「相談窓口」運営

詐欺被害者支援を継続中

□世田谷支部では、詐欺被害者支援のための相談窓口の開設を続けています。世田谷区内の2つの警察署から被害者や被害者の関係者へリーフレットを手渡しで配布いただいているほか、東京社会福祉士会のホームページで5月から7月まで試験的に情報を公開して呼びかけてを行いました。被害の数は多いと報道されていますが、問い合わせはそう多くなく、こちらの受けられる体制も考慮しながら広報の検討を続けながら行っています。

被害に遭われた方は、甚大な影響を被り、心に深い傷を負っています。これまで大切に貯めてきたお金が失われ、人生の計画が変わってしまった方。詐欺だったと気づいて強い自責の念に駆られ、家族へどう伝えたいものか、ひとりで悩んでおられる方。事実を知った家族から投げかけられた厳しい言葉で強いショックを受けている方もおられます。

詐欺被害でお金が戻ってくる可能性は高くありません。その伝え方や対応に苦しんだという警察の方の声も聞かれるところです。

どうやったら詐欺被害に遭われた方のお力になれるか、考える日々です。



公益社団法人 東京社会福祉士会
Tokyo Association of Certified Social Workers

 お問合せ

[トップページ](#) / [センター発のお知らせ](#)

詐欺被害者支援のための電話・オンライン相談会

2025.04.30

立ち直りを支える地域支援ネットワークづくり事業部世田谷支部
世田谷社会福祉士会

「なんて振り込んでしまったのか」「もっと注意していれば・・・」「なんで気づけなかったのか・・・」と思われるかも知れません。
あなたは何も悪くありません。悪いのはすべて詐欺師たちです。
東京社会福祉士会立ち直りを支える地域支援ネットワークづくり事業部世田谷支部では、2025年5月から7月まで試験的に電話とオンラインでの詐欺被害者支援を行います。
世田谷支部では、2024年の秋から警察署と連携して、世田谷エリアを限定で取り組んできました。詐欺被害の深刻な状況を受け、エリアを限定せず、支援に取り組みます。
詐欺被害に遭うと、経済的な影響にとどまらず、精神的な影響、家族との関係性への影響など起こってしまいます。
詐欺被害後に、必要なことや支援について、相談することができます。
不安・心配・困っていることなどあればお気軽にお問合せください。

日時 2025年5月1日（木曜日）～2025年7月31日（木曜日）
対象 詐欺被害に遭われた方とご家族の方
費用 無料
申込 ご相談はこちらから
▶電話で相談
電話：070-1413-7491
▶LINEで相談
LINE公式アカウント：@067sobvm
※留守電の場合はお名前とご用件を録音してください。24時間以内に返信いたします

社会福祉士を目指す皆様へ

福祉にかかわる皆様へ

地域の皆様へ

東京社会福祉士会について

東京社会福祉士会の会員の皆様へ

●第3回広域ネットワークシンポジウムのご報告

SOSに気づき、受け止め、伴走し、地域をつくる
——支援者・支援機関の孤立を防ぐ“支え合い”の必要性

【 当事業部主催の「第3回広域ネットワークシンポジウム」(本年3月8日開催)について、
以下、ご報告いたします(開催から時間がかかってしまっており、誠に申し訳ございません)。 】

第1回目(2024年2月12日)は「居住支援」「障害者支援」「女性支援」という切り口で、第2回目(同9月29日)は「医療」「就労支援(障害)」「若者支援」という切り口で議論が交わされましたが、第3回目は新たな試みとして、「公開事例検討会」というスタイルでの実施となりました。

具体的には、次頁に掲げる“ざっくりした「事例」”をもとに、各演者が、

▼考えられる背景・要因

▼実際は顕在化していたであろう「見逃された事象」

▼介入すべきだった(SOSと認識すべきだった)ポイント

——などの“見立て”を発表し、質疑を通じて掘り下げていく構成で展開されました。

当日は小雪降る極寒の1日でしたが、大勢の方が会場の立川まで足をお運びくださり、またオンラインでも多数ご参加をいただきました。厚く御礼を申し上げます。



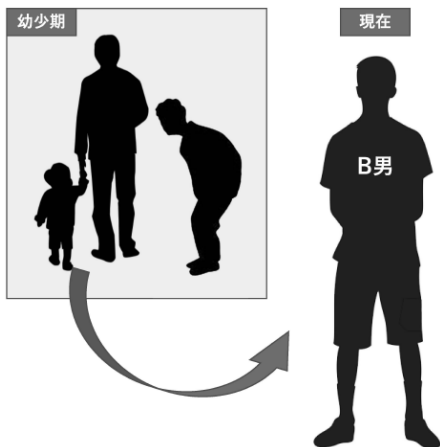
事例について説明する小林良子立ち直りを支える地域支援ネットワークづくり事業部副部長

「広域ネットワークシンポジウム」

各地区において「地域ネットワーク構築」に活かしていただくことを目的に、立ち直し支援にかかわる取り組みをどのような主体がどのように行っているかを確認し、連携構築にあたってどのような課題があるか、どのような工夫が考えられるか、何に留意したらよいか——などについて知見を集約・共有するために開催するシンポジウムです。



事例



B男は19歳。現在祖母、父親と3人暮らし。母親はB男が4歳の時に家を出て行き、それから3人で暮らしています。

小さい時の記憶は父親と母親の言い争いが絶えなかったことで、母親が出て行ってから祖母と一緒に住むようになりました。

父親はトラックの運転手で、たびたび家を空けますが、家にいるときはいつも飲酒しています。

幼稚園では他の子より少し出来ることが遅く、祖母が学校と相談しましたが、とりあえず普通学級に過ごすことになりました。

勉強はあまりよくわかりませんでした。

中学時代



中学の時に同じ学校のいつもの仲間から、ガスを吸うことを誘われました。少しドキドキしましたが、ビビってると思われないように、一緒にガスを吸ったところ、気が遠くなる感じでとても気持ちよくなりました。それからはたびたびガスで遊ぶようになり、仲間とお金のためにカツアゲや万引きをしました。

そんなことをしているうちに警察に捕まり、鑑別所に行くことになりました。鑑別所では色々な検査をしました。1カ月後、祖母が迎えに来て家に帰りました。

保護観察になりましたが、あまり保護司のところへは行かずに終わりました。



高校には進学せず、アルバイトを始めました。しかし、うまくできないこともあり、数か月で辞めることを繰り返していました。

パチンコやゲームの掛け金で借金ができました。

友達から「いい仕事がある」と誘われ、知らない人の所に荷物を受け取りに行く仕事を数回やりました。また来るように連絡が来ています。

事例に対する「各演者の“見立て”」

B男を支え続けてくれる存在が必要

脇本勇一郎氏（自立支援センター板橋寮相談係主任）



●私の所属する「自立支援センター」は、路上生活者／ホームレスの人（ネットカフェ等の生活者も含む）を対象に、衣食住の提供、就労支援、地域生活に向けての居住支援、退所後のアフターケア（生活相談・法律相談）を行う施設である。入所期間は6か月、アフターケアは退所から最大1年となっている。

●現状で、B男が自立支援センターにつながる可能性は十分ある。大きく分けて、次の3パターンが考えられる。①借金が膨らんで生活が回らなくなり、父・祖母との関係が悪化し、家に居づらくなって家を出、路上生活となってセンターにつながる。②非合法の仕事が怖くなって、家を出、路上生活となってセンターにつながる。③逮捕されて服役後、更生保護施設を経てセンターにつながる

●自立支援センターにつながった場合、年齢が19歳ということで、職はすぐに得られるだろう。ただし、継続するかどうかは別問題。仕事とのマッチングがうまくいかない場合には、障害者雇用も視野に入れることとなるが、本

人の同意が得られないケースがままある。

●無事退所してアパートでの1人暮らしに移行したとして、懸念されるのは「燃え尽き」。目標にしていたことが実現した途端にバーンアウンとしてしまうケースは、少なくない。あるいは悪い友達とのつきあいや依存症が再開するかもしれない。本人が“心の隙間”をどうやって埋めていけるかが課題だ。

●自立支援センターは、あくまでも通過施設。最大1年6か月という限られた期間のなかで、やれることには限界がある。B男の生活歴からして、はたして自助努力だけで今後の困難を乗り越えられるか。B男を支え続けてくれる存在が必要であるように思われる。

●父と祖母が存命であることは“強み”となりうる。いまは関係がうまくいっていないかもしれないが、専門の支援を得て家族関係を「再構築」できれば、B男が父や祖母を支える存在としての役割を得ることにもつながるかもしれない。

介入できるところから介入、孤立させないこと

板倉康広氏（家族相談室ドラセナ管理者）



●これは誰の困り事なのか。この世帯と周囲の関係はどうだったのか。地域の社会資源がどのように存在していて、それが彼ら（父、母、

祖母、B男それぞれの）の目にはどのように映っていたか。これまで見過ごされてきたのはなぜか。

●父母はなぜ互いに言い争わなければならなかったのか。母はなぜ出て行ったのか。その後、母と音信はあるのか。父はなぜB男を引き取ったのか。なぜいつも飲酒しているのか。祖母と息子・嫁の関係はどうだったのか。祖母は現状をどう捉えているのか。B男とその仲間はなぜ一緒にガスを吸うのか。保護司との関係がうまくいかないとか、アルバイトが続かず数ヶ月で辞めてしまうとあるが、その背景には何があるのか。こうした“なぜ”を「査定」していく必要がある。

●誰もが様々な立場・役割をもって日々を生活している。たとえば父親であれば、「B男の父」であり、「稼いで家計を支えている労働者」であり、「離婚歴のある中年男性」「アルコール問題で課題を抱えた人」「祖母の息子」でもある。どの側面に“生きづらさ”があるかが把握できれば、関わりをもつための糸口になる。

●家族相談では、「いま困っていて、変わりたいと思っている人」に焦点を当ててアプローチする。この事例では「困っている」のは誰か。家族それぞれが自己実現を図るうえでどのような課題があるかを考えることが必要。

●現実を受容するには、葛藤もあるだろうし、時間もかかるだろう。B男は“危ない仕事”をしなければ生きていけない状況へと追い詰められていたのかもしれない。それを「問題だ」と言われたら、否認したくなるだろう。そういう“心の綾”を理解して、一緒に考えていくスタンスが必要。

●介入できるところからどんどん介入して、孤独にさせないことが大事。何かが変わることで、波及効果が期待できる。問題点よりもニーズや希望に光を当てて、伸びしろ・可能性を高めることに注力する。関係者で手を携えれば、介入できることはたくさんあると思う。

「支えてもらう」ことで、道が開ける

服部善光氏（東京グレイスロード統括施設長）



●私の勤める「東京グレイスロード」は、当事者による当事者への支援（ピアサポート）に取り組む「ギャンブル依存症専門の回復施設」である。具体的には、グループミーティングや自助グループへの参加を柱に、安全な居場所の提供、相談事業、予防・啓発活動、サポート事業、関係機関との連携などを行っている。かく言う私自身も、当事者である。

●事例のB男の辿っている経過は、まさしく依存症の典型的な行動パターンと言える。私の当事者経験から、悪い行いへのハードルが低くなっていく感覚はわかるし、アルバイトが

長く続かず入っては辞めてを繰り返すというのは、私もそうだった。

また、B男は現状から抜け出すための人間関係が乏しく、紹介された“いい仕事”は九分九厘、闇バイト。状況は悪化の一途を辿っている。早期の介入が必要だ。

●B男が東京グレイスロードとつながった場合は、この先どうしたいか本人の話をじっくり聴いて、自分たちの経験も踏まえながら「いまでできること」を一緒に考えていきたい。

●依存症そのものに対処するのであれば、自助グループへの参加、行政による回復プログラ

ムへの参加、依存症拠点病院への通院または入院、回復施設への入所などのなかから、最善と考えられる支援を提案することになる。いずれも、同じような経験を持つ仲間とつなげることが、ベースとなる。

- 家族が相談に来られても、対応できることたくさんある。家族向けの「自助グループ」もあるし、家族同士が経験を共有して対応方法

を学び合う「家族会」もある。ご相談をいただければ、現在置かれている状況と何にお困りであるかをお聴きして、最善の社会資源につなぐことになろうかと思う。

- 一人で頑張っても難しい。誰かにつながって、誰かに支えてもらうことで、道が開けてくる。そして、巡り巡って、B男も父も祖母もどこかで“支える側”になっているかもしれない。

誤学習だが…「仲間とつながる」ための非行

長谷川義貢氏（東京保護観察所・処遇第二部門 統括保護観察官）



- 本事例では、「幼少期から両親が不仲」「実父による、家庭内における暴力に晒されていた」ということで、B男は虐待状況に置かれていたと推察される。加えて、「早期から実母と離別するなど、愛着形成に不利な状況のなかで生育してきた」（＝逆境的小児期体験をした）少年である、とアセスメントできるのではないか。逆境的小児期体験（ACEs）は依存症のリスクを高めることから、依存症が背景にあると疑われる事例では、確認が必須である。

- B男の実質的な養親となった祖母は、「実父の問題飲酒に、有効な対処をすることができていなかった」という点で、問題飲酒を助長してしまう可能性のある人（＝イネイブラー）だったのではないかと見立てることができる。依存症の世代間連鎖という視点から見ると、もしかしたら祖母も「逆境的小児期体験」を経験してきた人かもしれない。いずれせよ、祖母の問題解決能力がB男の育ちに何らかの影響を及ぼしている可能性は否定できない。

- B男に発達の遅れがある旨の指摘がなされているにもかかわらず、支援につながるこ

ができなかった。その理由や背景を、アセスメントの過程で明らかにしていく必要がある。

- 祖母と学校との間で話合いが持たれた際、その場に当事者であるB男はその話合いに参画できていたか。本人不在のまま周りだけで本人の将来に関することを決め、B男のニーズがくみ取られずにいたという状況はなかったか。（「こどもまんなか」の視点の有無の確認）

- ガスの吸引、恐喝、万引きなどは、B男が置かれた地域社会のなかで、社会的孤立を避ける手段として、また仲間とつながり孤立から逃れるための本人なりの手段として、機能していた可能性がある。もちろん、これらは「誤学習」である。

- B男は逆境のとも言える成育環境の中で社会学習の機会が不足していたのかもしれないし、生来の知的能力が低かったのかもしれない。発達上の障害についてアセスメントがなされていても地域の関係機関の間で十分に共有されてこなかったのかもしれない。以上のことから、B男はいまなお生きづらさの渦中

にある——ということなのかもしれない。

●保護司のところに行った時期もあったが、その後ほとんど行かなくなってしまったということは、当初、保護観察に何らかの期待をしていたものの、それが満たされず中断に至ったということが考えられる。だとすれば、どのような期待を保護観察に抱いていたのか、B男の視点で検証していく必要がある。

●実母との離別後、父方の祖母が一貫してB男の養育に関わってきたことは、強みとして挙げることができる。また、B男は非行や犯罪に手を染める形にはなったが、自分を受け入れてくれる仲間を探し、連帯を維持しようとしていた。それ自体は、B男の「対人希求能力の旺盛さ」と評価することができる。よい人間関係やよい環境があれば、B男の改善更生の可能性は高まる。

●保護観察では、以下のような取り組みを行うことになる。

- ・耳を傾けてくれる人（批判しない、安全な人）がいることを知る機会をつくる
- ・新しい価値観と出会う機会をつくる（主体的な回復行動を促すきっかけになる）

- ・依存する場所（頼れる場所）が地域のなかにあることを知る機会をつくる

- ・自分自身の問題に対して正直になれる機会と体験を提供する

- ・同じ問題を持つ人の存在（正直に自分の気持ちを話せる人）がいることを知る機会をつくる

- ・周りと自分を比較するのではなく、あるがままの自分を肯定する大切さを伝える機会をつくる

●保護観察所は従来、一定の期間が過ぎると、困りごとを相談されても対応することができなかったが、2023年12月から犯罪・非行の地域相談窓口「りすたぽ」を各保護観察所に設置し、対応の間口を広げ、相談があれば、個々に応じた社会資源につなぐという枠組みができた。ぜひご活用いただきたい。

●大変なケースほど、対象者は孤立している。それを助けようとしている支援者も孤立しがちになる。支援者が孤軍奮闘の末に燃え尽きてしまわないように、支援者を支援する体制を作ること大切だ。頭から「できません」ではなく、「ここまでならできる」というスタンスで連携の輪に加わってもらえるよう、排除の構造を崩す、粘り強い働きかけが必要だ。

ディスカッション

前段の各演者による発表を受けて、プログラム後半は、①コーディネーターとシンポジストの質疑応答、②フロアとの質疑応答、③まとめ——という順に展開されました。



コーディネーターVSシンポジスト

(コーディネーター：今福章二氏（中央大学法科大学院客員教授）)

——支援者と当事者、両方のお立場をご経験されてきた見地から、B男の目に映っている世界、感じている生きづらさについて、コメントを。

居場所で余儀なくされる “非行への同調”

【服部氏】 B男の友人関係が“条件つき”



であるかのような状況が気になる。B男的にはそこが居場所になっていたが、その場にいるために、自身で望まない「ガス吸引」にも

付き合わざるをえなかった——ということだったのではないかと。怪しいアルバイトも、B男は話を聞いて驚愕したはず。でも、既に出来上がっている人間関係のなかで、Noと言えなかった。

そもそもB男の人生は成功体験より負の体験が多過ぎて、自己肯定感が形成されてこなかったものと考えられる。「自分はずっとダメなままなんだ」「落ちていくしかない」という漠然とした不安・絶望に囚われていたのではないかと。きつかったろうと察せられる。

——支援機関として1年6か月の間にできることの限界と、その後も「B男を支え続けてくれる存在」について、もう少し掘り下げを。

専門機関の職務を超えた 「人間関係のニーズ」

【脇本氏】 我々自立支援センターの職員



は、「支援員」としての立場から、仕事として利用者と接している。皆さんが就労してアパートに移って自立した生活を送る

ことをゴールに、日々取り組んでいる。そんななか、当センターの職員が退所者のアフターフォローで自宅訪問に回っていたとき、ある年配男性の退所者からこう言われたことがあった。「友達になってほしい」と。つまり、仕事としてではなく、人としてこの先もずっと自分のことを気にかけてほしい。ときどき隣に来て、話を聴いてくれる存在でいてほしい——という求めだった。こうした、職務の枠を超えたニーズに対してどう答えたらよいのか。今回の事例でいえば、B男はこの先も数々の困難に遭遇することになるだろう。そんなとき、専門的支援とは別に、なんでも打ち明けることができるような「ただ隣にいてくれる存在」がB男には必要ではないかと思う。

——「隣にいてくれる存在」があれば、B男の幼少期からの生きづらさは軽減された？

アウトリーチしていれば、 たどり着けた

【脇本氏】 これは想像だが、B男家の内情



はご近所の方々も薄々ご存じだったのではないかと。『おばあちゃんがB男君の面倒を見ていて、旦那さんは不在。いるとき

はいつも酔っぱらっている』ぐらいのことは。でも、そこから先につながらなかった。このような状況では、やはりおせっかいを顧みず、“飛び込んでいく”役回りの人が必要だろう。フォーマル／インフォーマルどちらの属性かはともかく、アウトリーチがなされていれば、B男の困り事にたどり着くことができたのではないかと考えられる。

——事例を通して、B男および家族へのかかわりで「足りなかった」ものはなにか。

——B男の「非行傾向」は、今後の支援の“足かせ”となるのか？

「どこでどのような支援が受けられるか」の視覚化が必要

【板倉氏】



このケースは、時間を追ってあちこちで孤立が起こっている。夫婦関係の破綻で父と母が孤立し、仕事による父の不在でB男も孤立した。祖母が学校にB男の発達について相談するも、はぐらかされた形で孤立する。背景には、理解の不足、想像力の欠如、支える社会資源の不足、啓発の不在があった。

それともう一つ、当事者側から周りの景色がどう見えていたかということも重要。『支援を受ける選択をしない』のは、それが選べるように見えていなかったのかもしれないし、あるいは支援の存在が見えていなかったのかもしれない。

社会資源はそこにあればいいのではなく、“見える”こと、イメージできることが決定的に大事。

私たち支援者側から「こういうメニューがありますよ」ということを、地域に対してわかりやすく情報提供する必要があるのではないか。

非行や犯罪傾向の根源は「安心安全な環境を希求する力」

【長谷川氏】



保護観察官としての経験に照らして言えることだが、非行傾向が進んでいても、環境との相互作用により、そこから抜け出すことはできる。回復を安心安全に支える環境のなかで、自身と似た境遇にあった仲間や、ピアサポートするロールモデル的な先達との出会いや交わりを通じて、見違えるように“変わっていく”のを、私は何度も見てきた。

彼らをして非行や犯罪に向かわせるものは、突き詰めれば「安心安全な環境への希求力」である。安心安全な環境が確保されれば、彼らが自ら進んで非行や犯罪に走るのは考えにくい。非行傾向・犯罪傾向というのは、ある意味、『生きたい』という思いの強さや勢いが誤学習によって非行や犯罪といった形で外在化した状態と言える。方向性は間違っているが、厳しい環境下にあってもどうにかして「生き延びたい」という気持ちの強さの表れだと捉えれば、B男がとった行動は「レジリエンスの強さ」というか“強み”として評価することもできるのではないかな。



左端がコーディネーターの今福氏。右隣からシンボジストの脇本氏、板倉氏、服部氏、長谷川氏

フロアVSシンポジスト

参加者A

——世間の偏見やレッテル張りを跳ね返して更生へと向かうためには何が必要か

「頑張ったな」という 全肯定の言葉が何より響いた

【服部氏】自分の経験から言えば、セルフヘルプでいただいた「頑張ったな」という言葉が、胸に響いた。「辛かったな」とかではなく、「頑張ったな、今日まで」って。「よく生きて来たな」と。やり方は間違ったかもしれないけど、今日まで何とか生きながらえてきた自分の人生を全肯定してもらった気がして、なんかふーっと、全身から力が抜けた。この人になら何を話してもいいかなという思いになった。それが転機だったことを、いまもはっきり覚えている。

本人と一緒に「作戦会議」を

【長谷川氏】社会的不適応は「それだけ何らかのニーズが満たされていないことの裏返し」。その辛さに心を向けて、本人と一緒に「さてこの先どうしようか」と“作戦会議”をするような形で関わるスタンスが求められるのではないか。

参加者B

——どうしたらマイナスの依存先をプラスの方向へ変えていけるのか。

“仲間”の姿が刺激に

【服部氏】私も渦中にあるときは、変わりたいのに、どうしても反対の方向に行ってしまう。

う。何をやっても失敗するだけ——と自分を諦めていた。

でも、自助グループで、辛さ・苦しさを打ち明け合うことのできる居場所とともに、解決策をたくさん持っている仲間たちと出会って、自分もこうなれるのかな、できるならなりたいなって思うようになった。

いきなりパチンと変わるわけではないが、いろんな経験を経て、少しずつ改善の方向へ向いていくものと捉えていただけたらいいかなと思う。

参加者C

——B男の場合、自己肯定感の回復と居場所の確保では、どちらがより重要か。

「今日一日」の積み重ね、 仲間がくれる自己肯定感

【服部氏】居場所の確保が優先する。なぜなら、安全安心が確保されないと、自分と向き合う余裕を持てないから。

そのうえで、「人生の主導権」を取り戻すステップに入る。依存症の人は、依存対象ありきで考え、行動することに慣れている。そうではなく、「自分はこう思うからこうしたい」というように、自分ありきで考え、行動するように改めていく。

依存症の当事者の回復で大事なことは、とにかく「今日一日」を大事に過ごすということ。それを繰り返して、気がついたら自分のことをコントロールできるようになっていて、仲間から何気なく「お前変わったね」とか「最近いい感じじゃん」とか声をかけられて、自己肯定感の回復につながっていく。

締め括りコメント

生きづらさを汲み取る関係性

【脇本氏】 NHKのドキュメント番組で、



東日本大震災で完全に孤立した集落を救うため、突貫工事で物資運搬や救急搬送のための「道を造った」建設業経営者の話を取り上げていた。誰かから頼ま

れたわけでもないのに、なぜ危険を顧みずそのようなことをしたのか問われ、その社長は「困っているということだったから、自分にできることをやったまで」と語っていた。

これを見て思ったのは、B男や家族の生きづらさが伝わっていれば、「そういうことなら」と対応できる社会資源があったのではなかったか——ということ。地域のなかで互いに生きづらさを汲み取る関係性や、それを育む仕組みが、いま求められているのではないかな。

「“自分語り”ができる場所」があるといい

【板倉氏】 本事例でいえば、「うちの母ちゃん、出てっちゃったんだ



よ！」と父が泣き言を言える場所が、地域のなかにあればよかったのに——と思う。「うちの孫が捕まっちゃってね

ー」と祖母が愚痴をこぼせる場所だったり、「うちの父ちゃん、いつも酔っぱらっているんだよ」とB男が不服をもらせる場所があれば、と。地域につながる場所があって、そこに地域の一員として私たち支援者も参画するような仕組みがあるといい。

「ここまでならできる」という関わりでOK

【服部氏】



自分たちに対応できないことばかりに目がいて、「とてもじゃないが関わることはできない」と不安な気持ちになるのはわかるが、発想を転換して「ここまでならできる」と捉え直し

てみてもいいのではないかな。そこから先は、やってくれる所に任せる。そうやって、連携の間口が広がっていくといい。

SOSを受信するルート、支援者の孤立を防ぐネットワークを

【長谷川氏】



大変な状況に置かれた子どもたちを取り残さないために、周りの大人たちが子どもたちのSOSをあらゆる形で受信できるルートを増やしていく必要がある。

あわせて、支援者のバーンアウト防止も重要な課題だ。担当の支援者が抱え込んだり、関わった支援機関が地域のなかで協力を得られずに孤立したりすることのないように、地域のなかで立ち直りを目指す人と支える人それぞれのネットワークの構築が求められる。



コーディネータ総括

今福章二氏（中央大学法科大学院客員教授）

【今福氏】 皆さんありがとうございました。



人は成長の過程で、社会参画していくための踏み台になってくれたり、失敗しても受け入れてくれたり、伴走してくれる存在を必要とします。なのに、B男の周りには、「ただ隣にいてくれる人」がいなかった。「No と言えない人間関係」にからめとられ、自分を押し殺して従わなければ生きていけないような世界を生きていた。ニーズは見逃され、それが積み重なって、危機的状況となって顕在化した。要約すると、以上のような見立てを立てていただきました。

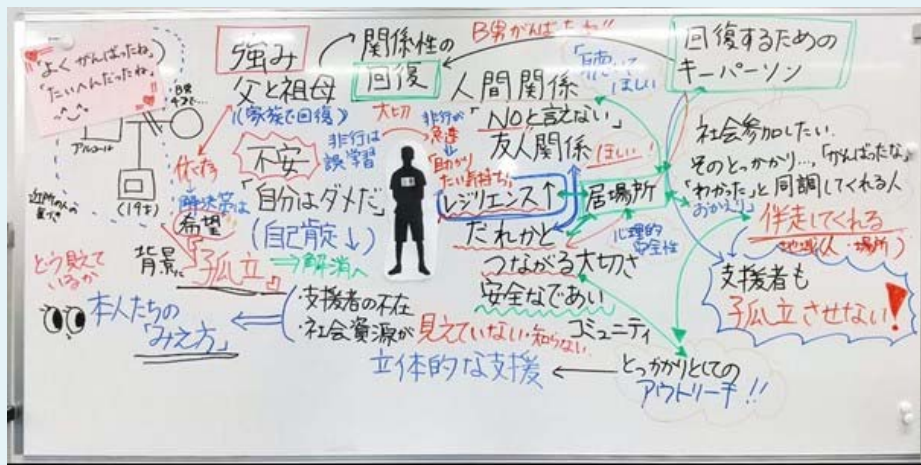
そして、こうならないようにするために、何が必要だったか？ このあとどのようにB男を支えればよいか——という議論を掘り下げていただきました。双方に共通して必要なのは、ひとつの支援機関や一人の支援者がそのまま抱え込まずともいいように、地域内でネットワークが必要だということです。

ホワイトボードでかなり丁寧に拾っていたので（編集注：リアルタイムでホワイトボードに発言内容を書き取っていた＝下記参照）、詳細はこちらを見ていただければと思います。

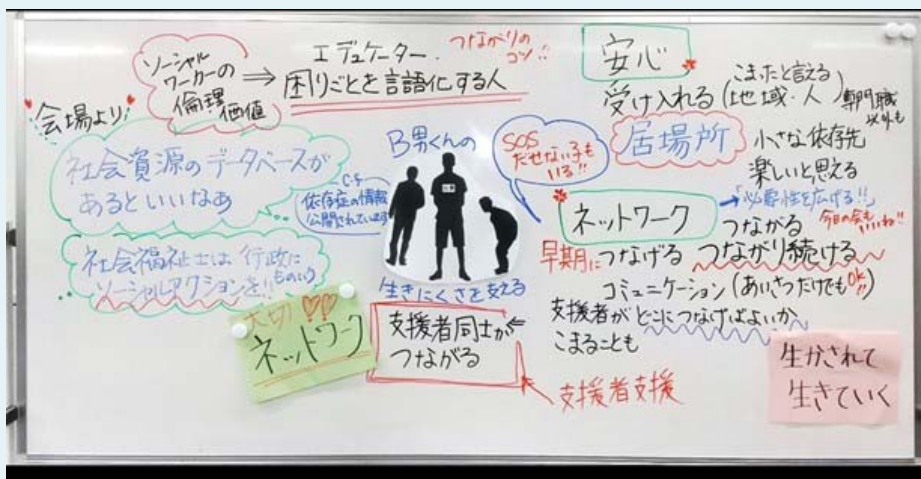
本日は、演者の皆さんが数々の名言をご披露されています。立ち直り支援に関わるすべての関係者の共有資産として、使わせていただきます。

シンポジウムの内容を可視化するため、
リアルタイムで発言内容を書き取ったホワイトボード

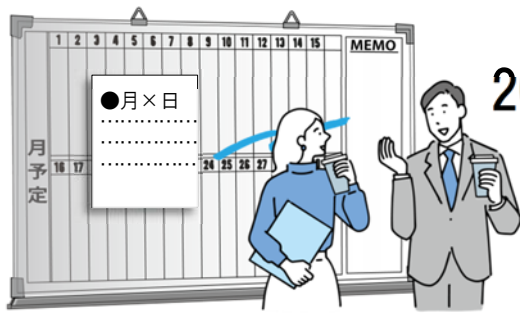
課題、強み、必要な支援



考えられる支援体制



（記録＝当事業部・澤氏）



2025年11月～2026年2月の動き



月日	予定
11月2日（日）	三鷹武蔵野支部上映会「プリズン・サークル」14:00-16:30、武蔵野スイングホール
11月9日（日）	専門分野研修「新しい更生保護」13:30-16:30、オンライン
11月17日（火）	杉並支部（立ち直り杉並）しゃべり場「若者支援の取り組み」20:00-21:00、オンライン

リレーコラム

立ち直りを支える地域支援ネットワークづくり事業部員が持ち回りで伝えます

「地域づくり」があってこそその司法福祉

小林良子

立ち直りを支える地域支援ネットワークづくり事業部副部長
司法福祉委員会委員長

2022年冬、更生保護協会の休眠預金活用事業の募集を知って、「刑事司法ソーシャルワーク活動の地域資源との連携に活用できないものか」と考えました。対象者の帰住希望地域にどのような資源があるのか、誰と繋がるのが必要／有用であるか——などについて、地域の社会福祉士会に相談することができたら、より具体的な支援ができるのではないかと、という発想でした。

他方、地域で罪を犯した障害のある方が、障害福祉サービス事業所から利用を断られることも珍しくありません。対象者の立ち直りを支えるには、それぞれの地域において、福祉関係者への啓発を進める必要があります。あわせて、自治体は各々制度や考え方が異なるため、地域ごとの対応が大切です。ちょうど、東京社会福祉士会には地区会があり、地区会単位で各自自治体と繋がることができます。更生保護協会が募集していた事業内容は「立ち直りを支える地域ネットワーク創出事業」でしたので、まさにぴったり！と申請をしたところ、通ってしまったという次第です。

司法福祉は地域福祉の中でも新参者。現在、再犯防止推進計画を制定している自治体は都内では15区23市2町と、まだまだ途上です。本事業部では約2年で8地区支部ができました。各々が各地区で活動をしています。また、支部でない地区会でも矯正施設の見学会や司法福祉をテーマに集まりを開いてくださっています。2026年2月で本事業は終了しますが、この間、会員の意識に司法福祉の問題が入ったのではと想像します。これからますます、ですね。